

資質・能力を育成するために

～子どもたちの主体的・対話的で深い学びを通して～

1-1

STEP 1

学校として育成を目指す資質・能力の設定



小学校の場合

国 社 算 理 生 音 図 体 家 外 道 総 特

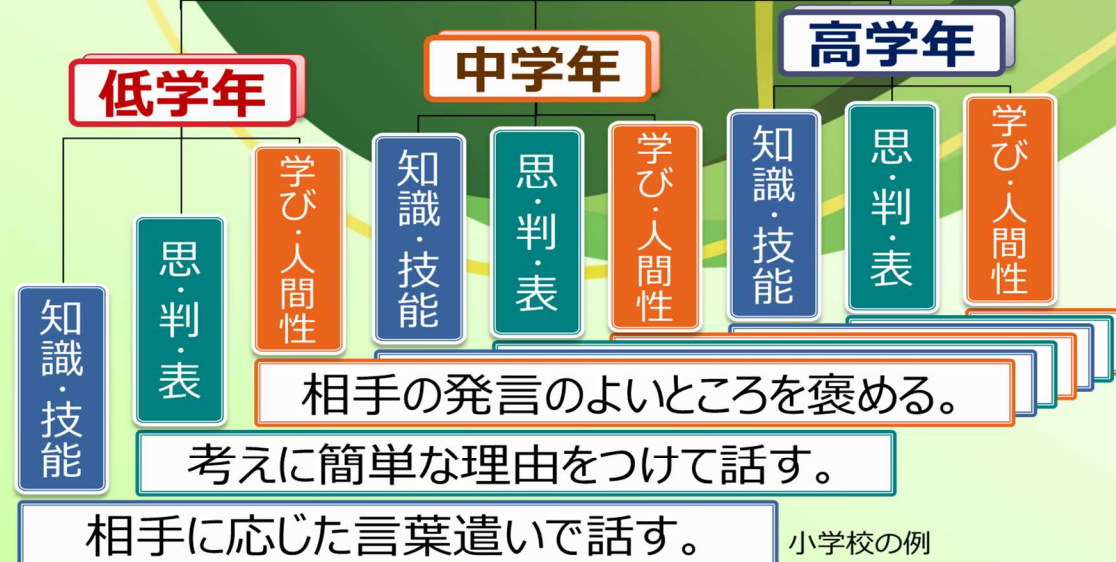
教科等を貫く資質・能力の横串

語 会 数 科 活 楽 工 育 庭 語 徳 合 活

STEP 2

児童生徒の具体的な姿を「三つの柱」で整理

コミュニケーション能力を設定した場合



小学校の例

STEP 4

PDCA サイクルによる資質・能力の育成



STEP 3

「手立て」を用いた授業改善（AL の視点）

深い学び

【手立て1】問いの工夫

思考を促す問い



戦国武将になったつもりで、3人のうちの一人にアドバイスしよう。



まず調べて…グループで相談をして…発表は…

【手立て3】リフレクションの設定

書いてまとめる

類題を解く

グループ内

ペア

説明し合う

主体的な学び

【手立て2】思考スキルに応じた思考ツールの活用

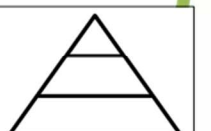
分類する

思考スキル

構造化する



思考ツール



対話的な学び

これからの時代に求められる資質・能力を教科横断的に育成する指導法に関する研究

1-2

本リーフレットは、平成29年2月に掲載した内容に、「新学習指導要領」（平成29年3月）の趣旨を踏まえて改訂しました。研究報告第422号は、学習指導要領改訂に向けた国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究」（平成26年3月）や、中央教育審議会の審議をもとに、今後の学校教育の方向性を示したものです。その内容を広く学校現場で活用していただくために、直近の教育情報を加味して本改訂版リーフレットを作成しました。各学校において、「主体的・対話的で深い学び」を通して、どのように「資質・能力」を育成していけばよいのか、本リーフレットや研究報告第422号を参考に方向性を導き出していれば幸いです。

千葉県総合教育センターカリキュラム開発部研究開発担当
<https://db.ice.or.jp/nc/kenkyu/houkoku/kaihatsu/>



STEP 1

学校として育成を目指す資質・能力の設定

「これからの時代に求められる資質・能力」とは、どのようなものなのでしょうか？本研究では、国立教育政策研究所が示した「21世紀型能力」や、中央教育審議会が示した「三つの柱」に見られるような、三層構造からなるものととらえました。そして、これらは互いに密接に関連したものであり、個々に切り離して育成すべきものではないと考えました。

しかし、そうすると、学校ではどこから手をつけてよいのか迷ってしまうことでしょう。そこで、本研究では、学校として育成を目指す資質・能力を一つに絞り込み、その育成に伴って、他の資質・能力をも育成していくという考えを提唱しています。つまり、一つに絞り込んだ資



質・能力を「教科等を貫く資質・能力の横串」として設定し、全職員の共通理解のもと、学校全体で育成していくことで、同時に他の資質・能力も育成していくという考え方です。

STEP 2

児童生徒の具体的な姿を「三つの柱」で整理

育成を目指す資質・能力を、「教科等を貫く横串」として絞り込んだら、資質・能力を発揮している具体的な児童生徒の姿を考えましょう。設定のポイントは、次の三つです。

①児童生徒の姿を「三つの柱」に沿って整理する。

知識・技能の定着が重要なのは当然ですが、求めるべきは、思考力等や学びに向かう力、人間性です。

②児童生徒の姿はなるべく平易な言葉で表現する。

明瞭簡潔で誰もが意識しやすく、共有しやすい言葉で表現しましょう。

③力を出表する場面を意識した表現とする。

力とは、表出する場面をもってこそ推し量ることができます。児童生徒の具体的な姿も、力を出表する場面を意識した表現としましょう。

コミュニケーション能力を設定した場合



STEP 3

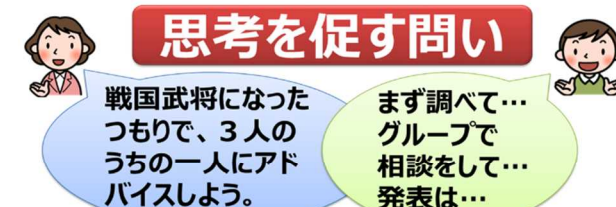
「手立て」を用いた授業改善（ALの視点）

各学校において「育成を目指す資質・能力」を育むためには、実際の授業ですべての教員がその資質・能力を意識し、学校全体で継続的に取り組むことがポイントになります。そのためには、教科等を横断して継続的に取り組めるような有効な「手立て」が必要になります。そこで、本研究ではその「手立て」として、次の三つを提示しています。

【手立て1】問いの工夫

深い学び

児童生徒の思考力を育てるには、自ら考えたいくなるような「問い」を設定することが効果的です。自ら考えたいくなるような問い、すなわち「思考を促す問い」に出会ったとき、児童生徒は主体的に考え、課題を解決したくなります。それにより、解決するためにはどうしたらよいのかを一生懸命考え、学習課題から解決に至るまでをイメージします。問いを工夫することで、学習活動を変え、思考力、判断力、表現力等を育成する授業のあり方について、本研究では具体的に提示しています。



【手立て2】思考スキルに応じた思考ツールの活用

対話的な学び

「思考」という言葉は、余りにも大きすぎて不明確です。単純に、児童生徒に「考えましょう」と言っても、「どのように考えるのか」を示さなければ、「思考」を具体的に捉えることはできません。思考力を育成するためには、この「思考」を細分化・具体化して児童生徒に示した上で、考える方法を具体的な学習活動として用意する必要があります。



そこで、考えを深めるために必要な思考力を、「思考スキル」として整理するとともに、その育成に有効であると思われる「思考ツール」を、学習の中で取り入れる方法を例示しています。

【手立て3】リフレクションの設定

主体的な学び

これからの授業は、児童生徒が見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びの過程を実現することが一層重視されます。そのため授業において、学習をまとめたり振り返ったりする学習活動がますます重要になります。

本研究では、この学習活動を思考力、判断力、表現力等を育成するという観点で整理し、学習活動を、教科等を横断して継続的に取り入れていくための具体例を例示しています。



STEP 4

PDCA サイクルによる資質・能力の育成

以上の内容をもとに、「内容について、活動を通して指導しながら、資質・能力を育てる」ことを意識して毎授業で実践し、その結果を検証・改善するPDCAサイクルを確立することができます。必ずや児童生徒の資質・能力の育成につながるはずです。

このリーフレットを参考に、各学校で育成を目指す資質・能力を設定し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めましょう。